

1 祖父江友孝委員長あいさつ

— 食品安全委員会の3つの課題 —

2003年に食品安全基本法が成立し、食品安全委員会が設置されてから23年が経過しました。牛海綿状脳症（BSE）問題に端を発して、食品の安全性確保に必要な新たな行政組織のあり方について検討された結果、「リスク評価機能を中心とし、独立性・一貫性をもち、各省庁と調整機能をもつ新たな食品安全行政機関」として設置され、これまでに、3000件以上の食品健康影響評価（リスク評価）をとりまとめ、リスク管理機関へ通知してきました。これらを通じて、リスク評価に関する数多くのノウハウを蓄積してきました。

一方で、食品のリスク評価をめぐるのは、新たなハザードが出現し、また、新たな評価手法が開発される等、状況は日々刻々変化しています。そうした中で、これからの食品安全委員会として、優先順位の高い課題を3つ挙げたいと思います。

1つは、食品のリスク評価の中で、ヒト疫学データをどう活用するか、についてです。食品安全委員会がこれまで数多くの評価を経てノウハウを蓄積してきたのは、主に汚染実態のない新規物質であり、これらの評価では動物実験のデータが中心となってきました。一方、近年、ヒト疫学研究のばく露評価において生体試料を用いることにより信頼性が改善したこともあり、汚染実態のある既存物質では、ヒト疫学研究が評価の中心となることが散見されるようになりました。こういったヒト疫学研究が主体となるハザードの評価では、動物実験のデータを中心とする評価で蓄積されてきたノウハウをそのまま当てはめることが適切ではない場合が認められる印象があります。ヒト疫学研究をリスク評価に用いることは、食品安全分野よりも他の分野（環境、労働衛生、放射線防護など）で多く経験されているので、これらを参考に進めることが重要と考えています。

2つめは、複数・混合ばく露の問題です。個々の評価書は、単一のハザードの評価をしますが、現実の世界では、人間は複数のハザードから同時にばく露を受けています。本来、こうした複数・混合ばく露の問題は、リスク管理の中で対応すべきものかもしれませんが、複数・混合ばく露を考慮した評価手法についても検討していく必要があります。

また、近年急速に集積されつつあるゲノム情報に対して、環境側の要因を総括するエクスポソームという概念が提唱されています。エクスポソームとは、人が生涯にわたって経験するすべての環境ばく露の総体であり、食品を含むすべての内因的・外因的ばく露を指します。こうした流れの中でも、複数・混合ばく露の重要性が増していると考えています。

3つめは、リスクコミュニケーションの中でも、専門家同士のリスクコミュニケーションの問題です。リスクコミュニケーションは、複数のリスク管理機関とリスク評価機関が連携して行う必要があり、消費者庁が主導的な役割を果たすこととされています。食品安全委員会の役割としては、リスク評価結果等、科学的な知見を国民にわかりやすく説明することが求められていますが、その前提として、専門家同士のリスクコミュニケーションを進める必要があります。これまで、福島第一原発事故後の放射線被ばくの健康影響、あるいは、コロナ禍での対応などで、専門家同士の意見が大きく対立すると、国民の中での混乱の度合いが増す、といったことが経験されてきています。国民に対するリスクコミュニケーションに加えて、専門家同士のリスクコミュニケーションにも注力することが必要と考えます。

また、こうした個別の課題とは別に、組織として構造的な問題として取り組むべき課題として、AIを中心とする情報技術の進歩への対応があげられます。具体的には、リスク評価作業、情報収集作業、および情報提供作業等への活用が想定されますが、それを支える人材の育成が急務となっています。

食品安全は、食品の公正な貿易を確保するための国際規格を策定することが主目的の1つであるため、国際的な連携が必須となっています。アジア諸国を含む諸外国の食品安全に係る機関と連携を取りつつ、独立したリスク評価機関としての質の高い科学的水準を維持するとともに、国内外への情報発信機能をさらに強化していく必要があると考えています。

祖父江友孝